平成２７年１０月１３日(火)

老球の細道１７１

「ミニバスケットボール指導者に告ぐ！」

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

１９世紀初期イエナの戦いにおいてプロシア（現ドイツ）がナポレオン１世に蒙った徹底的な敗北は、ドイツの愛国心に深い傷口を開いた。彼らは全力を尽くして、この国家滅亡の諸原因をつきとめ、国家に権力を回復させるための方法を探求した。その時ドイツの哲学者フイヒテ（１７６２－１８１４）は「勝利をもたらすのは腕の値打ちでも、武器の値打ちでもない。それは魂の力強さである」と叫び、ドイツ国民に大きな反響を呼んだ。歴史上有名なフイヒテの『ドイツ国民に告（つ）ぐ』である。

フイヒテの格調高い話からトーンダウンするが、かつてミニバスケットボール指導者懇親会（通称飲み会）において、多くの指導者を前にして「ミニバスケットボール指導者に告ぐ」と称して「必殺！四つのお願い」を生意気にも語ってしまったことがある。

一つ、勝つことよりバスケットボールの面白さを教えてほしい。他との競争で勝つことのみを強調する指導は絶望を生む。勝てなかった子供たちは自然とバスケットボールからリタイアする。自分を高めるための競争は希望を育てる。たとえ試合に勝てなくとも、自分自身の向上が自覚できれば努力が報われることを学ぶ。但し、「試合(ゲーム)」は勝つことを目標に全力を尽くすことを教えることは言うまでもない。

二つ、バスケットボールの基本を正しく指導してほしい。高い目標、広い世界を目指すためには強固な土台が必要なのは何事において共通である。ミニの時代にスーパースターであっても基本ができていない選手はいずれ行き詰まりがやってくる。練習とは良い習慣を身につけること。もっとも技術習得の高いミニの時期に正しい基本を指導されていない選手は、練習すればするほど下手になっていくという理不尽なことが起こる。努力は報われなければならない。報われない努力は悲劇になることもある。

三つは、学校の勉強をまず優先させてほしい。勉強をやりたくないからバスケットボールを頑張るということはバスケットボールの神様に失礼である。学校の勉強は学生としての基本中の基本である。基本を大事にしない者に明日はない。バスケットボールは高度になればなるほど頭を使うプレーが増えてくる。頭脳を常に鍛えていない選手には耐えられないことである。バスケットボールプレーヤーであるからこそ勉強を人一倍して人間としての基礎をしっかり作っておく。私の自己反省から痛感している。

四つ、家庭（過程）を大切にしてほしい。自分の家庭をないがしろにして、選手の家庭をないがしろにしてバスケットボールはできない。家庭、家族のバックアップがあってこそ、子ども達もコーチも全力でバスケットボールに打ち込め、毎日夢を持って元気に生きることができる。また、子供たちの日頃のコーチングにおいても結果で評価するのではなく過程を大切にする。「家庭」と「過程」は有意義なコーチングをするための大切なキーワードである。

２０２０年の東京オリンピックを目指して日本のバスケットボールは間違いなく変わっていく。今後、世界に通用する日本のバスケットボールを構築していくのは日本代表のコーチやプロバスケットボールのコーチではない。育成年代に「バスケットボール魂」を育てるミニバスケットボールのコーチ達であると思う。